

歴史を語る建物たち

第6回

今日、20世紀型の開発優先社会は終息を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

旧山形師範学校「教育資料館」(山形市)



山形市の中心部、遊学館（県立図書館、県生涯学習センター）の前をほぼ東西に延びる、通称“三島通り”の突きあたりに、ルネサンス様式を基調とした西洋風の本造建築がある。

明治34年に完成した旧山形師範学校（現在の教育資料館）で、昭和48年に国の重要文化財に指定されている。

近代教育の幕開け

明治5年、新政府によって「学制」が發布されると、文部省（当時）は小学校などの教師を養成するため、東京にわが国初の師範学校（翌年、東京師範学校に改称）を創立した。

その後、全国で小学校が増加すると、文部省は各府県に師範学校設置を奨励した。これを受けて、山形県令（今でいう県知事）・三島道庸（^{みちつね}1835-1888）は、明治9年に山形県師範学校創立の計画を立て、同11年、現在の県民会館付近に新校舎が完成した。

奇しくも、明治9年は鶴岡県・置賜県・山形県が合

併して、現在の山形県ができた年であり、初代県令・三島の教育熱の強さがうかがえる。

しかし、生徒数の増加と共に、校舎が次第に手狭となったため、明治34年、現在地に校舎を移転した。折しも時は1901年、20世紀の始まりである。



師範学校全景（撮影年次不明）。正面校舎の左側には学寮があった。資料：山形大学教育学部九十年誌。

なお、当時の記録を見ると、「宏大雄偉蓋シ東北ニ冠タリ」(大きく立派な校舎は東北を代表するものである)〔沿革誌〕と書かれている。

昭和18年には、山形県女子師範学校(明治35年創立)と統合し、官立山形師範学校となった。そして、昭和24年、新学制(6・3・3・4制)施行により山形大学が誕生すると、山形大学教育学部となった。

この間、数多くの優秀な教師を輩出し、「教育県・山形」の礎を築いた。

「たそがれ清兵衛」と「山びこ学校」

「たそがれ清兵衛」「蝉しぐれ」「武士の一分」など多くの作品が映画化された、わが国を代表する時代小説作家・藤沢周平(1927-1997)は、旧制鶴岡中学(現鶴岡南高校)を卒業すると、昭和21年に山形師範学校に入学した。藤沢はのちに、師範学校を選んだ理由として、「教師という職業は、(略)人間の可能性を引き出したり、発見してのばしたりすることで子どもが少しでもしあわせになれる方向にみちびく、やり甲斐のある仕事のように思われた」と書いている(藤沢周平『半生の記』)。

師範学校時代の藤沢は、同人誌『砕氷船』の発刊に関わるなど、当時から文学に傾倒していたが、一方で、隠れてタバコを吸ったり、授業をサボって映画を見に行ったりと、「とにかくろくな学生ではなかった」(同)と述懐している。

「山びこ学校」で知られる無着成恭(1927-)も、山形師範学校の卒業生である(昭和23年卒)。卒業後は、南村山郡山元村(現上山市山元)の村立山元小・中学校(平成18年に小学校が休校となり、現在は市立山元中学校)に赴任し、中学生が、厳しい雪国の生活や人々の様子を率直に描いた作文などを文集にまとめ、『山びこ学校・山形県山元村中学校生徒の生活記録』として出版した。

本はベストセラーとなり、映画化もされるなど、同校は全国的な注目を集めたが、地元では、「貧しさを世間にさらした」という人もおり、無着は村を去った。

しかし、近年、無着の功績は再評価され、平成16年に、当時の教え子たちが、共同で管理してきた本の売り上げ(印税)

の一部を使い、学校の敷地内に、無着の教えを刻んだ石碑を建立した。

同窓生の熱意が実る

昭和38年、教育学部が、現在の山形大学小白川キャンパスに移転すると、施設が国から県に移管され、校舎は県立山形北高校となった。しかし、昭和46年に校舎改築が行われ、現存部分以外は解体された。

現存部分についても、重要文化財に指定されるまでは何度か取り壊しの計画が出たが、同窓会などからの強い保存要望が実を結び、壊されずに残されてきたのである。

そして、昭和53年、師範学校創立(明治11年)からちょうど100年を迎えたのを機に、約1億円かけて解体・復元工事が行われた。工事は昭和55年まで行われ、同年10月1日に、「山形県立博物館・教育資料館」として新たな門出を迎えた。

現在、館内には、江戸時代の藩校・寺子屋時代から現在までの、わが国および山形県の教育の歴史について、数多くの資料が展示されており、近代以降の教育史について一連の流れを学ぶことができる。

特に、明治時代の教科書などは、実際に取ってみたいことができ、当時の教育内容を知るうえで、非常に興味深い。

より積極的なアピールを

山形市内では、現在、山形県郷土館「文翔館」(旧山形県庁舎および県会議事堂)、山形市郷土館「旧済生館本館」(旧山形市立病院済生館)、そしてこの教育資料館が、国の重要文化財に指定されている。

これら3つの建物は、いずれも山形市中心部の半径1 km圏内に位置しているが、これだけ狭い範囲に重要文化財の西洋風建築物が存在しているのは、全国的にもほとんど例がない。

教育資料館は、毎年行われる山形北高校の文化祭の時には、一般市民などに無料開放され、また、同校の生徒がホームルームの時間に見学に来ることもある。しかし、全体的には上記3つの建物の中では、教育資料館が、一番客足が少ないように感じる。

筆者は、そんな静かな雰囲気が好きなのだが、同館で学芸員を務める青木章二さんは、「名前が地味なのでしょうか。本当はもっとたくさんの方に来てほしいのですが…」と語る。

青木学芸員によると、3つの建物はそれぞれ管轄が異なるという。しかし、今後は、行政の壁を越え、相互の価値を高め合っていく必要があろう。例えば、3館共通入館券の発行や、“スタンプラリー”のような企画などはいかがだろうか。

(荘銀総合研究所 研究員・山口泰史)



無着成恭が、赴任校の生徒に書かせた文集は本になり、映画化もされるなど、大きな社会現象となった。資料：図説 山形県史。